

# サロンで行う シニア犬ケアの基礎知識

シニア犬がサロンに来店した時、万が一のことを考えて“〇歳以上はお断り”と断ってしまうお店も多いかと思えます。

しかし、新たに犬を飼う人が頭打ちとなり、シニア犬が増え続けている現状を考えると、シニア犬に対するケアがしっかりできるサロンは、売上を伸ばす可能性が高いといえます。

そこで今回は、シニア犬に関する基礎知識とケアのやり方を中心に、獣医師の視点からみたサロンで行いたい正しいシニア犬ケアについて紹介します。

Text:大野瑞絵 Illustration:ヨギトモコ

## 監修 林文明

「すべての動物たちを救いたい!」という強い想いから、動物たちの「ノアの箱船」になるべく開院されたノア動物病院の院長。現在、5軒の動物病院を運営しており、飼い主さん向けのしつけ教室や高齢犬セミナーなども数多く行っている。

## そもそもシニア期とは?

### 飼い犬の約4割がシニア犬

現在、シニア世代(7歳以上)の犬が、全体の約4割を占めています。右肩上がりです。2003年度の調査では62.4%が「犬を飼っている」と回答しています。そして、そのブームを支えた犬たちが、今まさにシニア犬となっています。

飼育を取り巻く環境の変化もまた、犬の長生きを可能にしています。

飼い主の健康に対する意識が変化し、ワクチン接種率が向上。小型犬ブームにより室内飼育が増加したため、愛犬に安全な環境を提供しやすくなりました。また、目も行き届きやすくなりました。『ペットではなく、家族』という意識の高まりは、食住環境を充実させています。後述するように高齢になれば増える病気もありますが、獣医療の発展もそれをフォローしています。

### シニア犬の特徴

では、シニア期に入るといえるのはどういうことなのでしょう。

犬種や体格、栄養状態、生活環境などによって個体差はありますが、少しずつ老化の兆しが現われはじめるのが、シニア期の入口です。人間の年齢に換算してみると、犬(小・中型犬)の7歳は、人間の44歳くらいに当たります。

(※表参照)

どんな犬でもすべてが同じように老化するわけではなく、老化の要因には、遺伝、栄養、環境などが関係しています。遺伝的には、小型犬は大型犬より、雑種は純血種より長生きする傾向にあります。栄養面では、肥満な犬は痩せた犬より短命になります。また、高脂肪・低繊維の食事は寿命を短くしますが、バランスの取れた食事は長寿を助けます。

高齢になると体のさまざまな機能や能力が徐々に衰えます。皮膚の新陳代謝が衰え、寝ている時間が多くなり、散歩時間も短くなってくるため、筋力の衰えが目立つようになります。五感の衰えと関連して、若い頃から積み重ねます。

なってきた不安体験があると、その気持が大きくなり、不安症状をみせることもあります。

また、行動にも変化がみられるようになります。足腰が弱くなるためトイレまで移動するのが大変だったり、腎臓機能低下による多尿、筋力の低下などが原因で粗相することが多くなります。認知機能も低下するので、コマンドに従わない、刺激への反応が鈍くなるといったことも起こります。

食事にしても、嗅覚や味覚が低下するために食欲が低下したり、排泄機能が低下するために下痢や便秘をしやすいくなります。

※詳細は次ページを参照ください。

## 犬と人間の標準年齢換算表

小・中型犬	人間	小・中型犬	人間
1カ月	1歳	8年	48歳
2カ月	3歳	9年	52歳
3カ月	5歳	10年	56歳
6カ月	9歳	11年	60歳
9カ月	13歳	12年	64歳
1年	17歳	13年	68歳
1年半	20歳	14年	72歳
2年	23歳	15年	76歳
3年	28歳	16年	80歳
4年	32歳	17年	84歳
5年	36歳	18年	88歳
6年	40歳	19年	92歳
7年	44歳	20年	96歳

## シニア期にみられる変化

### ( 筋・骨格系の変化 )



- 起き上がるときに体が重そう。
- 歩くときに足腰がふらつく。
- 歩く速度が遅くなり、寝ている姿勢から立ち上がるまでに時間がかかる。
- 段差の上り下りがしにくくなる。

### ( 被毛・皮膚の変化 )



- 口や鼻の周りに白髪が出始め、加齢とともに全体に広がる。
- 皮膚の弾力がなくなる。
- 皮膚が薄くなる。
- フケや体臭が出る。
- 鼻や肉球が硬くなる。
- 皮膚にシミができる。
- イボができる。

### ( 神経系の変化 )



- 刺激に対する反応が低下する。
- 認知機能が低下し、問題行動が起こる。
- 全身のふるえがみられる。

### ( 感覚器系の変化 )



- 視力が低下し、近くのものが見えにくくなる。
- 白内障の症状が出始める。
- 聴力が低下し、低い音が聞き取りにくくなる。
- 嗅覚が低下し、においを感じる能力が衰える。
- 感覚機能の低下によって、不安が増大する。
- 新しいものごとに慣れにくくなる。

### ( その他の変化 )



- 免疫力が衰える。
- 病気が発症しやすくなる。
- 傷が治りにくくなる。

### ( 消化器系の変化 )



- 噛む力の低下、歯石の沈着、歯の脱落により、歯周病が起こりやすくなる。
- 胃腸がストレスの影響を受けやすくなる。
- 肝臓や膵臓での消化酵素の分泌が減少し、代謝や解毒作用が衰える。

# ケアする前に行いたい 健康チェック

## シニア犬 健康チェックシート

年 月 日

犬名	お客様名		
犬種	生年月日	年	月 日生
<b>【ケア前】</b>			
■ 元気 ( 正常 異常あり ) ※元気消失していないかなどをチェック。			
■ 体重 ( kg 正常 ・ 異常あり ) ※急な体重の増減がないかチェック。			
■ 心拍数 ( ~ / 1分間 正常 ・ 異常あり ) ※安静時に動脈(足の付け根の内側)に手を当てて測る。 小型犬で1分間に60~120回程度なら正常。			
■ 歩き方 ( 正常 ・ 異常あり ) ※軽快に歩けない、歩くのを嫌がる、疲れやすくないかチェック。			
■ 口の中 ( 正常 ・ 異常あり ) ※歯肉を指で少し押し、指を離してすぐに赤みが戻れば正常。			
■ 歯 ( 正常 ・ 異常あり ) ※歯の汚れ、出血、強い口臭などがいないかチェック。			
■ 皮膚 ( 正常 ・ 異常あり ) ※首の後ろの皮膚をつまんで持ち上げ、すぐに戻れば正常。			
■ 排便排尿 ( 正常 ・ 異常あり ) ※便や尿に異常がないか、多飲多尿になっていないかなどをチェック。			
■ 食欲 ( 正常 ・ 異常あり ) ※食欲は落ちていないか、食べ過ぎていないかなどをチェック。			
■ 目・鼻・口・耳・肛門・外陰部などの汚れやにおい ( 正常 ・ 異常あり ) ※各部位に汚れや悪臭がないかチェック。			
■ 行動 ( 正常 ・ 異常あり ) ※異常な行動をしていないかチェック。			
■ その他 ( )			
<b>【ケア後】</b> ※見つけた異常や気になったことを記入。			

シニア犬をサロンに迎える場合は、事前の健康チェックがとても重要になります。  
少しでも気になることがあれば飼い主に確認や報告をし、場合によっては獣医師の受診を薦めましょう。

### 事前の健康チェックが 最も重要

シニア犬が来店した場合、その子が健康であればさほど問題はないため、ケアする前に健康チェックを行うことがもっとも重要になります。

- 1 心拍数：来店後、犬が落ち着いたらのを見計らい、安静時の心拍数をチェック。動脈(足の付け根の内側)に手を当てて測ります。小型犬で1分間に60~120回程度なら正常です。
- 2 口の中：歯肉を指で少し押し、指を離してすぐに赤みが戻れば正常です。
- 3 歯：歯の汚れ、出血、強い口臭などがいないかチェックします。
- 4 皮膚：首の後ろの皮膚をつまんで持ち上げ、すぐに戻れば正常です。
- 5 歩き方：軽快に歩けない、歩くのを嫌がる、疲れやすくないかチェック。
- 6 日頃の様子：多飲多尿になっていないか、元気はあるか、食欲はあるか、排便排尿に変化はないか、体重に変化はないかなどを飼い主に確認。

また、慣れないサロンでのグルーミングがきっかけとなって、隠れていた病気が発症することもあります。気づいたことがあれば飼い主さんにお伝えし、明らかな異常があれば、早めに動物病院での診察を薦めます。

人間同様、犬もシニア期には体の各機能が衰えていき、病気にもかかりやすくなります。

シニア期にかかやすい病気の特徴を知っておくことは、早期発見にもつながります。

## シニア期に多い病気

### ( 心臓の病気 )



大型犬やコッカースパニエルに多いのは拡張型心筋症です。心筋が薄くなって心臓が肥大し、収縮力が弱くなるため十分な血液を体に送り出すことができず、循環不全を起こします。

小型犬、とくにキャバリアに多いのは僧帽弁閉鎖不全症です。左心室と左心房の間の弁(僧帽弁)が正常に閉じなくなるため、血液の逆流が起こります。

**症状:**拡張型心筋症では腹水がたまる、肺水腫を起こし咳や呼吸困難を起こす、元気がなくなる、意識を失うといった症状が、僧帽弁閉鎖不全症では息切れ、肺水腫、ゼーゼーと苦しそうな咳(とくに夜間~明け方)がみられます。

**予防:**心臓への負担を増大させないよう肥満を防止し、好発犬種では定期的に心臓の検査を受けましょう。

### ( 関節の病気 )



老化すると、骨は脆弱化し、股関節、肘、膝、肩などの関節軟骨はすり減っていきます。筋肉の衰えや肥満によって関節への負担が増大します。シニアの大型犬に多いのが変形性骨関節症です。

**症状:**痛みは軽いですが慢性的で、運動すると疲れやすくなったり、段差を嫌がります。足を痛がる、足を引きずる、腰を振って歩く、横座りするといった症状もみられます。

**予防:**適切な食事と適度な運動によって肥満を防止し、高いところから飛び降りるなどの関節に負担のかかる運動は避けましょう。グルコサミン・コンドロイチンなどのサプリメントも予防の助けとなります。

### ( 腫瘍 )



加齢は、腫瘍の大きな要因のひとつです。増殖や転移しにくい良性腫瘍と、増殖し転移する悪性腫瘍(がん)があります。腫瘍は遺伝子に傷がつくことから起こりますが、高齢になるとその機会が増える一方で免疫力も低下するため、発症しやすくなります。その中でも多いのは、リンパ腫(とくに多中心型リンパ腫)、肥満細胞腫、メスの腫瘍のなかでもっとも多い乳腺腫瘍です。

**症状:**腫れやしこり(リンパ腫ではとくにリンパ節、乳腺腫瘍では乳腺)のほか、リンパ腫では元気がない、疲れやすい、肥満細胞腫では下痢や嘔吐といった症状がみられます。

**予防:**決定的な予防策はありませんが、乳腺腫瘍は初回発情前の避妊手術によってリスクを低減させることができます。

### ( 腎臓の病気 )



シニア犬に多い腎臓の病気は、慢性腎不全です。血液中の老廃物をろ過し、尿として排泄したり体内の水分調整をするのが腎臓の役割ですが、高齢になるとその機能が衰え、老廃物が蓄積されるようになります。気がついた時はかなり進行していることが多い病気です。

**症状:**食欲がなくなる、元気がない、頻繁な排尿、水をよく飲む、嘔吐することが多い、毛づやが悪くなるといった症状がみられます。

**予防:**新鮮できれいな飲み水を常に与えましょう。早期発見のため、体重や行動、飲水量、体の状態をよくチェックすることが大切です。発症したら進行を遅らせるため、タンパク質、ナトリウム、リンを制限した処方食を与えましょう。

## ( 生殖器の病気 )

オス



去勢していない高齢オスの半数になるといわれるのが前立腺肥大です。老化によって精巣ホルモンのバランスが変化することで起こる病気で、肥大した前立腺は、周囲にある尿道や膀胱、直腸を圧迫します。

初期のうちに気づいて去勢手術を行えば、進行を食い止めたり、小さくすることが可能です。去勢しているオスに前立腺肥大がみられる場合、前立腺がんのおそれがあります。

**症状:**尿が出にくくなる、血尿が出る、便秘になる、便が出にくい、排便回数が増えるほか、前立腺に炎症が起きると痛みがあります。

**予防:**去勢手術をすることでほぼ予防できます。

メス



子宮蓄膿症は、細菌感染や女性ホルモンの影響により、子宮内に膿がたまる病気です。避妊していない6歳以上のメスの多くが発症します。発情期のあともホルモンが出続けていると、細菌感染しやすくなるため、発情期が終わってから1~3カ月ほどで症状が現れることが多い病気です。

**症状:**多飲多尿、子宮に膿がたまるためにお腹がふくれる、食欲がなくなる、元気がなくなる、嘔吐、下痢、発熱などがみられます。気がつかないままに進行すると子宮破裂を起こし、腎不全や多臓器不全を発症します。

**予防:**出産させる予定がないなら、避妊手術を受けさせましょう。

## ( 痴呆 )



高齢になると感覚器官や自律神経の機能が低下し、刺激に対する反応に時間がかかるようになります。こうして認知機能の低下が進行して、学習機能や運動機能が著しく低下し、コミュニケーションをとれなくなる状態を痴呆といいます。

**症状:**知っている場所で迷子になる、撫でたり褒めても喜ばない、昼間よく寝て夜起きている、夜中に家中をうろつく、夜鳴きする、粗相が増える。進行すると、飼い主がわからなくなったり、巡回運動といった症状がみられます。

**予防:**予防は困難ですが、適度な刺激は認知機能低下を遅らせることができます。また、初期のうちに気づき、食事療法(b/d)やサプリメント(EPA、DHAなど)を与えることで、進行を遅らせる可能性があります。

## ( 歯の病気 )



老犬の口腔内環境は非常に悪くなっていることが多く、その8割ほどが歯周病になっていると考えられています。歯周病は、歯と歯肉の間に細菌が入り込んで増殖して歯肉炎を起こし、進行すると歯を支える歯槽骨が溶けて歯が抜けたりする病気です。歯周病をそのままにしておくと、細菌が全身にまわり、腎臓疾患や心臓疾患を起こすこともあります。

**症状:**強い口臭、歯肉の腫れ、歯がぐらつく、歯が抜けるといった症状がみられます。痛みがあるため食事に時間がかかったり、固いものを食べなくなります。

**予防:**幼い頃からの歯磨きの習慣を付けましょう。歯垢は3日ほどで歯石になるので、最低でも週に2~3回は行う必要があります。

シニア犬であっても、健康な子であればグルーミングのやり方はとくに変わりありません。ただし、体力や皮膚・被毛の状態は衰えてきているので、その子の健康状態をよくみながら、時々休憩を入れるなどしてグルーミングしましょう。

## グルーミング時の注意点

### ( 耳 掃 除 )



耳道の皮膚が赤い、脱毛、フケ・黒い耳垢・分泌物などが出ている、強い悪臭がするなどといった場合は、なんらかの耳の病気を患っている可能性があります。

また、しきりに耳を掻いたり、何度も頭を振ったりしている場合も同様です。

こういった場合は、早めに動物病院で受診するよう、飼い主さんに報告をします。

耳にとくに異常がみられない場合、通常の耳掃除と同じやり方できれいにしてあげます。耳掃除は、汚れをとることと、『通気性をよくする』ことが一番の目的となるので、あまりやり過ぎないようにしましょう。

### ( 爪 切 り )



犬に負担をかけないように、足をあまり上げずに手早く行います。

爪先は、掻いてしまった時に傷付かないよう、やすりで丸く削ります。

爪切りをする前に、すごく割れている爪がある場合は、足を引きずって歩いている可能性があります。これは、足腰が弱っていたり、何らかの病気を患っている場合のサインなので、飼い主さんに報告・確認するとよいでしょう。

### ( ブ ロ ー )



犬の体からドライヤーをなるべく離し、熱で皮膚をあまり刺激しないようにしながら手早くブローします。

シニア犬は、皮膚にイボができていることも多いので、ブラッシングする際は、スリッカーやコムをイボに引っ掛けないように注意しながら行います。

ずっと立たせていると、体力的につらい子もいるので、様子をみながら、座らせてブローするのもよいでしょう。

### ( シ ャ ン プ ー )



シャンプーする際は、子犬や成犬にする場合よりも手早く、さらに皮膚・被毛や健康状態を注意深く観察しながら洗います。

お湯は、35℃くらいのあまり熱くないお湯を使用します。心臓が弱っている子などは、熱めのお湯で洗ってしまうと血行がよくなり過ぎて心拍数が上がってしまう恐れがあるので注意が必要です。

また、気管支や肺などの呼吸器に病気を抱えている子は、蒸気を吸い込むと激しくせきこむこともあります。そういった子の場合は、バスやたらいにお湯を溜めておき、バケツなどでお湯をかけてあげるくみ置き洗いがおすすめです。

## サロンで行う シニア犬ケアの基礎知識

### ( カット )



シニア犬のカットは、まず飼い主さんが自宅でもお手入れしやすいようにすることが一番の目的となります。

噛む力が弱くなり、食事が上手にできなくなっている子も少なくないので、口周りなどはとくにさっぱりとカットしてあげるとよいでしょう。

足先、陰部、肛門周りも同様で、汚れやすい部分はお手入れしやすいように、さっぱりとカットします。

お客様が、施術にも時間がかかり、お手入れもしづらいデザインカットなどをオーダーしてきた場合は、犬に負担がかかることをきちんと説明した上、あまり負担のかからない範囲のデザインを施すようにしましょう。

### ( クリッピング )



シニア犬は皮膚がたるみがちなので、クリッピングする際は、よく皮膚を伸ばしながら手早く行います。

足裏を処理する際は、あまり足を上げずに手早く行い、皮膚が弱っている子などは、あまりクリッパーをかけ過ぎると皮膚が赤くなってしまいますので、注意が必要です。

また、シニア犬は突発的に急な動きをすることも多いので、注意します。

### ( 足腰が弱い犬のケア )



健康なシニア犬よりも、さらに手早くグルーミングして、犬の負担を軽くしてあげる必要があります。

シャンプーをする時は、二人がかりで行うのが基本になります。一人は腰に手を入れて支えてあげ、残りの一人が手早く洗うようにします。

それ以外のケアは無理して体を起こさず、犬が楽な姿勢にしてあげることを大前提にグルーミングします。犬の体を動かすのではなく、トリマーが体を動かしてケアしてあげることが大切です。

シニア期に入ると、体の衰えから成犬期と違った生活を送る必要があります。当然、飼い主さんへのアドバイスのポイントも成犬とは変わってきますので、しっかりとおさえておきましょう。

## お客様への アドバイスポイント

### ( 食 事 )



肥満は、心臓疾患や糖尿病などの原因にもなり、関節にも負担がかかるので、カロリーオーバーにならないよう注意します。心臓、腎臓や肝臓に負担がかからないよう、タンパク質、リン、ナトリウムなどを制限することも大切です。

また、老化すると内臓や歯が衰えるので、なるべく消化のいい食事を与えるようにしなくてはなりません。こうした点からも、シニア犬用フードへの切り替えをおすすめしましょう。

嗅覚の衰えから食欲をなくす子には、フードを温めてから与えたり、においが強くて口当たりのいい物を与えてみるとよいでしょう。

### ( 住 環 境 )



足腰にやさしい環境作りが大切です。フローリングは美観や掃除のしやすさなどから好まれる床材ですが、犬にとってはやっかいなもの。爪を立ててしっかりと踏ん張れず、つるつる滑ってしまいます。その際のちょっとした衝撃が、変形性骨関節症や変形性脊椎症を発症するきっかけになります。

目の詰んだカーペットは適した床材のひとつですが、生地がループ状になっていると爪が引っかかりやすいため危険です。滑りにくいタイルカーペットや、コルクカーペットなどを敷くことをお勧めしましょう。

### ( 運 動 )



『散歩は負担になると思って…』と散歩を控える飼い主さんもいますが、筋力が弱くなり早くに寝たきりになる危険性があります。歩くことができる限りは散歩をさせ、筋力を維持させましょう。散歩には外の刺激を受けるというメリットもありますし、心と体がほどほどに疲れれば、夜もぐっすりとお眠ってくれます。

あまり歩きたがらず、寝ていることが多くなった犬には、立ち上がり運動(食事などで誘導しながら、腰を支えて立ち方を練習させる)や、歩行練習(体を支えながら、最適な状態の歩き方を教える)を取り入れるとよいでしょう。

### ( ボディーケア )



ブラッシングは、日頃から行うとよい家庭でのボディーケアです。被毛の汚れを落とすだけでなく、皮膚や被毛に異常はないか、触られると嫌がる場所はないか、しこりなどができていないかをチェックするための大切な時間でもあります。

歯磨きも日頃から取り入れたいもののひとつではありますが、成犬にいきなり歯磨きを取り入れることは困難です。ただ、歯のチェックをする程度のは可能かと思えますので、口臭がないか、口の周囲を触ると痛がらないか、食べにくそうにしていなかったかといったこと、できるだけ早く気づけるケアをするようアドバイスしましょう。

### ( 痴 呆 について )



痴呆によって起こる問題には、徘徊や排尿障害などさまざまなものがありますが、多くの飼い主さんが悩むのは『夜鳴き』でしょう。

夜鳴きは、寂しかったり、時間の感覚が麻痺していることも原因です。対策としては、EPAやDHAといったサプリメントをあらかじめ飲ませておいたり、寂しくないように電気やテレビをつけておくといった方法がありますが、『夜は寝かせるようにするにはどうしたらいいか』も考えるといいでしょう。昼間は短い散歩に何度も行くなどしてできるだけ起こしておく、日光浴をさせるなどといったことも、生体時計の調節に役立ちます。

### ( 介 護 について )



もっとも気をつけてほしいのは、床ずれ(褥瘡)を作らないということです。一度できると治すことは困難なので、まずは寝たきりにさせない必要があります。

もし、寝たきりになってしまったら、寝床は十分な気配りが必要で、人の介護の現場では高反発マットが推奨されるようになってきました。2～3時間おきに寝返りを打たせたり、床ずれができやすい部分には、ドーナツクッションなどを敷き、圧力が1カ所にかからないように配慮しましょう。